

文化 第七十八卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷  
平成二十七年三月二十五日発行

# 座小田豊教授の業績と学風

原

塑



## 座小田豊教授の業績と学風

原 塑

座小田氏の哲学上の仕事の中で二つの大きな柱になっているのは、ドイツ近現代哲学の著作の翻訳と、ヘーゲルを中心とするドイツ観念論の内在的研究である。哲学書に限らず外国語の重要な著作の日本語への翻訳は、その内容を日本における読者にとって母語で理解可能にするだけでなく、新たな訳語を案出することで、日本語の表現を広げる点で大きな意義をもつ。座小田氏が手がけた翻訳書は全部で二十二点におよび、そこにはH・ブルーメンベルク『コペルニクスの宇宙の生成』全三巻（小熊正久氏、後藤嘉也氏との共訳、法政大学出版会、二〇〇二〜二〇一一年）のような浩瀚な著作も含まれる（東北大学哲学研究会編『思索』第四十七号、二〇一四年の巻頭に、座小田氏的全業績の目録が掲載されている。ご関心のある方は、是非ご覧いただきたい）。したがって、座小田氏の

翻訳上の業績を概観することは、座小田氏の研究を引き受け、継承する上で、欠くことが出来ない作業である。とはいえ、本稿では、翻訳者としての座小田氏ではなく、氏が研究論文の中で示してきた思索者としての座小田氏に焦点をあてて、その業績を概観していきたい。

哲学の古典的テキストをその中に埋没しつつ読解すること、つまり少数の特別に重要な概念に与えられている独特の意味合いを突き止めながら、それぞれの書籍において、一人、もしくは多くても二人くらいの思想家が展開している思索の構造を明らかにしていく作業は、哲学研究の中で最も興味深い営みである。それは、一つ一つの内容を一つのピースとするジグソーパズルの絵柄を描いていく作業に似ている。古典の解釈において、意味を確定すべき概念群は、解釈者が生み

出したものではなく、書籍の中にすでに与えられたものである。したがって、概念の意味を、解釈者の好きないように決めることはできない。また、概念群を組み立てながら、解釈者が再構成する議論（これが、解釈である）も、解釈者の思い通りにはならない。とはいえ、古典の中に、どのような意義深い議論を発見するのは、解釈者の関心やセンスにおおいに依存する。そのため、どのような書籍と取り組み、解釈を通じてそこからどういった議論を取り出してくるのを見れば、解釈者の個性や思想上の好み、哲学研究を行う上での目的といったものを読み取ることができる。

座小田氏が研究の初期から現在に至まで取り組んできたのは、十九世紀の始めに活躍し、ドイツ観念論を完成させたG・W・Fヘーゲルの解釈的研究である。ヘーゲル哲学の特徴は、全体的秩序形成への志向にあるといえよう。ヘーゲルは、神や自然、個人、社会からなる世界を、一定の構造をもった全体的秩序として理解しようとする。また、全体的秩序は合理性の刻印を帯びており、合理性の核となる精神を備えている人間は、反省的認識を通じて、そのような世界の全体性を把握することができるとも仮定されている。現代哲学において、極端に還元的な科学主義的立場をとるのでない限り、世界の全体的秩序を一元的に捉えるこ

とができると原理的にさえ想定することは困難である。この点で、ヘーゲルはとても楽観的な哲学観を抱いている。このような哲学観を裏打ちしているのは、全体的秩序やその中の哲学的営みに対する高い信頼であり、それがヘーゲルの思索に独特のおおらかさと包容力を与えている。こういったヘーゲル哲学の特徴は、座小田氏にも引き継がれている。

ヘーゲルが提示する全体的秩序を再構成する作業は、しかし全く容易ではない。全体的秩序形成の要になる原理は、精神や意識は本有的に否定性をもつという仮定である。「意識が媒語Mitteであり」おのれ自身の反対「でありうる」のだ（座小田豊「無限と否定性——ヘーゲルのイェーナ体系構想における「精神哲学」の成立」『思索』第四十七号、二〇一四年、十頁）。精神が自分そのものではない様々な存在を内属させる（否定性）からこそ、精神による統一的秩序の（再）構成が可能になる。とはいえ、このような否定性の仮定は直ちに受け入れ可能ではないし、またヘーゲルによる思索の展開の理解を困難にもする。

実際、ヘーゲル哲学の解釈は容易ではない。ヘーゲルの思想の核を捉えようと彼のテキストに没入し、テキストに忠実な解釈を提示しようとする者はしばしば、ヘーゲルに特有の概念群の磁力に引っ張られて、

自分が読み取った内容を再現する際にヘーゲル自身の口吻をまねてしまうことがある。このようなヘーゲルの解釈論文は、ヘーゲルのオリジナルのテキストと格闘する時に感じるような苦勞を讀者に強いることになる。幸いなことに、座小田氏の手になる諸論考は、こういった研究とは全く別物である。座小田氏は、こなれた、しかし格調高い日本語によって、ヘーゲルのテキストの手堅い解釈を提示する。こういったことが可能なのは、座小田氏が研究の最初期の段階で、ヘーゲルの思索の体系に対して透徹した見通しをもち、その思索に対して、自身がとるべき態度を見抜いていたからであると思われる。

論文「自由と共同——イェナ期ヘーゲルにおける個別者の問題」(『思索』第九号、一九七六年)は座小田氏が弱冠二十七歳の時に発表した最初の論文であるが、その中に、座小田氏のヘーゲル理解の全体像を提示する重要な一節がある。引用しよう。

可想界と現象界との間、つまり天使と獣の中間に位置する人間の分断・抑圧状況を克服するために、は、人間の内にある理性性が人間の現実(自然及び社会)の中に理性性を認識し、現実総体を理性性の全体性の内に組み込むことができればならない

——体系はそのためにこそ求められるのである。

(中略)ヘーゲルの理性性は、現象Ⅱ分裂の中に理性性を認識し、理性性の全体性の構成を目指すという働きを与えられる。その理性性の全体性は神学的に解すれば神の自己展開—自己内帰還の運動であり、人間学的に解すれば「個別者の自己実現」の過程である。しかし、経験的認識から出発せざるをえない有限なわれわれ、しかも複雑化した様々な機構の中で文字通り分断されているわれわれは、ヘーゲルの「理性」論を個別者の自己実現の理論と見做す以外にない。それはまた、時代の分裂状況の克服を企図し、「人間たちの生活に参加するいかなる帰路が見出されなければならないか」と自らの苦勞を書き記したヘーゲルの意を汲みとることにもなるからである。(二〇三頁)

この一節は、これが書かれて以降、現在に至まで、座小田氏がヘーゲル研究で扱うことになるテーマ——自由、神、歴史、良心——の背景をなし、それら結びつける着想を簡潔に示している。つまり、私たちが直面する社会的現実や自然は、個別ばらばらであり、我々各人はその中で自分自身を見失っているように見えるが、それらの現実には合理性を内在化させ

ており、私たちがそのことを認識し、全体的な秩序の中に位置づけていくことで、各人は真に自由なあり方を実現することができるということである。また、人間の精神が神的な契機を含んでいる限り、各人の自己実現は、神の自己展開と自身への帰還であるとも見ることができると。このような見通しをもちながらも、座小田氏は、少なくとも出発点においては、特に自由に焦点をあてつつヘーゲル解釈を進める。というのも、解釈者としての座小田氏は、さしあたり神のような視点に立つことができず、現在の矛盾に満ちた社会的現実には拘束されているからである。自分のあり方を反省しつつ、ヘーゲルの議論を辿って行こうとするのならば、まずは人間が自由に至る過程を明らかにすることが目標になるのは自然である。神について、座小田氏が主題的に取り扱うようになるのは、この論文が執筆されてから十年以上経過してから発表された論文「ヘーゲル哲学の根底にあるもの——主観性と神の思想——」（弘前大学哲学会編『哲学会誌』第二十三号、一九八八年）である。この論文では、ヘーゲル哲学において神概念がもつ意味合いを、古代哲学以来の哲学史を概観しながら、明らかにしている。

座小田氏が、ヘーゲルやヘーゲルと同時代の哲学者——フイヒテやシェリング——の解釈を通じて展開し

てきた、自由、神、歴史、良心についての思索は、それ自身として大変興味深く、哲学史研究として大きな意義をもつ（一般の読者の手に届きやすいように、書籍にまとめて提示して頂けるとありがたいと思う。私も是非拝読したい）。とはいえ、座小田氏の思索を引き継ごうとする時、哲学史研究上の意義に加えて知りたいたいののは、ヘーゲルを解釈することの現代的な意味合いである。この点で参考になるのは、論文「社会科学における「客観性」の問題」（滝浦静雄編『哲学の再構築』南窓社、一九八七年）である。この論文は、ヘーゲルの社会的共同体論・自由論の観点に立ちながら、現代の社会科学研究の特徴を的確に記述し、社会科学研究が向かうべき方法を提言する野心的な内容をもつ。残念ながら、この論文で提示した見方を座小田氏自身はその後、展開していない。座小田氏がヘーゲル解釈によって得た知見を基礎にして、私たちが生きる現実と切り結ぼうと試みたのは、つい最近のことであり、東日本大震災の経験の契機とする。

東日本大震災の経験は、自然に囲まれて生活し、自然物として時間・空間に拘束されざるを得ない人間存在を改めて主題化し、考察する動機づけを与えるものだった。震災後、多くの研究者が注目したのが、科学技術の不確実性やリスクといった概念から構成さ

れる問題群だったが、座小田氏が注目するのは「ふるさと」(Heimat)である。ふるさとは、ハイデガーが『根拠律』で「世界の根拠」と呼ぶもののことであるが、哲学にとってふるさとの重要性は以下の点にある。「ふるさと」とは、私たちが生まれ育った、安心して生きていくことができることを意味するが、哲学はそれと同時に、探求されるべき最終目的地を「ふるさと」とみなすのである。つまり、哲学にとって

「ふるさと」は、自らがそこから出てくる「根源」であり、そこへと帰って行くことを目指す「目的」だというわけである(「精神の生活——「喪われた者たち」の「記憶」と「ふるさと」の根源的な力について」座小田豊・尾崎彰宏編著『今を生きる——東日本大震災から明日へ！第一巻 人間として』東北大学出版会、二〇一二年、一六七頁)。座小田氏は、ヘーゲルの『精神現象学』を手がかりとしながら、ふるさとを「聖なる者たちの共同体」として肉付けする。つまり「ふるさと」は、(中略)精神の光のあふれるところ、「私が私たちであり、私たちが私である」ような「真実の共同・共生の国」である(同前、一七八頁)。このようなふるさとは、私たちそれぞれにとって追憶の中に存在し、そこには「喪われた者たち」に加えて、「一つひとつの生命を育む生活世界全体」が含ま

れる。東日本大震災で被災した共同体を再建し、復興するために、座小田氏は、このふるさとの概念を手がかりにすることが重要だと強調している(日本建築学会・地盤工学会共同企画討論『東日本大震災と向き合う』二〇一四年)。

座小田氏によるふるさと論は、これから詳細に展開されていくことになる。その際、同時並行的に、新たな観点からのヘーゲル哲学の読み直しも行われるのではないかと期待している。座小田氏のヘーゲル研究は現時点ではまだ完結していない。座小田氏に後続する者として、座小田氏が今後、どのような思索を展開するのかとても楽しみであり、氏との討論により学ぶ機会をもち続けたいと思う。